

六本木交差点



昭和初期

出典：昭和御大礼奉祝志

大衆化してきた活動写真も、六本木映画館の開業とともに、この付近の人々に新しい娯楽を与えてくれた。



平成 21 年

映画館は、今では銀行と携帯電話の販売店。

芋洗坂（六本木5、6丁目）



昭和 38 年

出典：みなと写真散歩

芋問屋があったためにこの名が付いた。朝日神社の先を麻布警察署の裏へ上がる道を言う。六本木交差点への道は明治時代中期以降に出来たものである。



平成 21 年

昔も今も郵便ポストの位置は変わっていない。電線のない電柱が見られるのは今だけ。近々には抜柱され電線地中化及び道路整備工事も完了する。

龍土軒（六本木7丁目）



龍土軒は、明治33年（1900年）に麻布新竜土町に開業した、当時としてはまだ珍しかったフランス料理店。田山花袋、蒲原有明、国木田独歩らがここを利用し龍土会と称した。

もともと画家、美術史家たちが常連であったが、麻布軍人町のど真ん中だったため、将校、将官等の利用が多く、昭和11年の2.26事件のころに青年将校たちの会合に用いられた事で有名。

明治時代からの藝術と国家変遷の生きた歴史であったが、現在は西麻布に移転し、跡地には別の新たなビルが建築中。

昭和29年



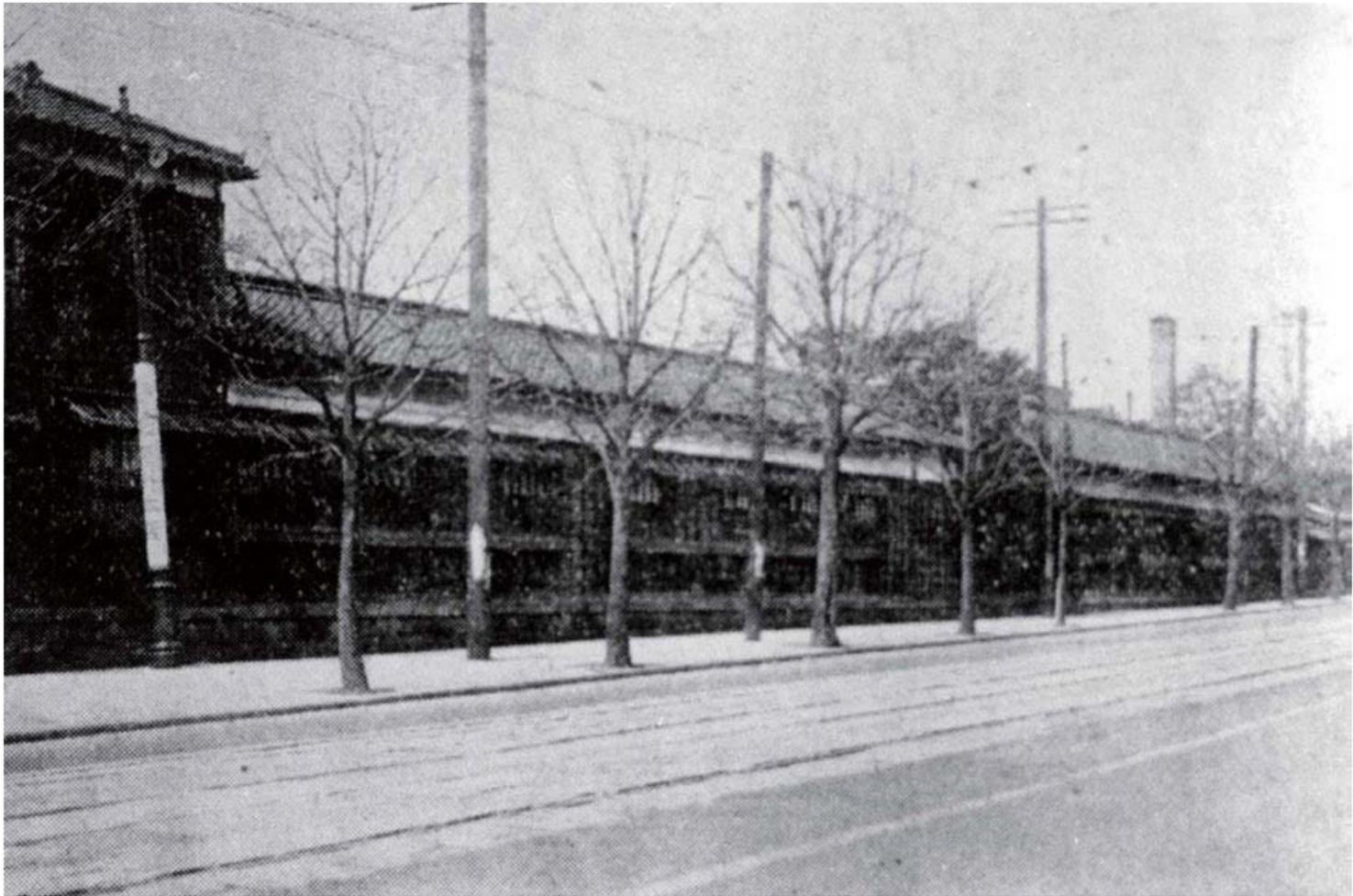
昭和39年

出典：みなと写真散歩



平成21年

飯倉片町（六本木5丁目）



昭和 16 年

出典：麻布区史

武者窓造り（縦に太い格子の入った窓）のお屋敷が残っていた。



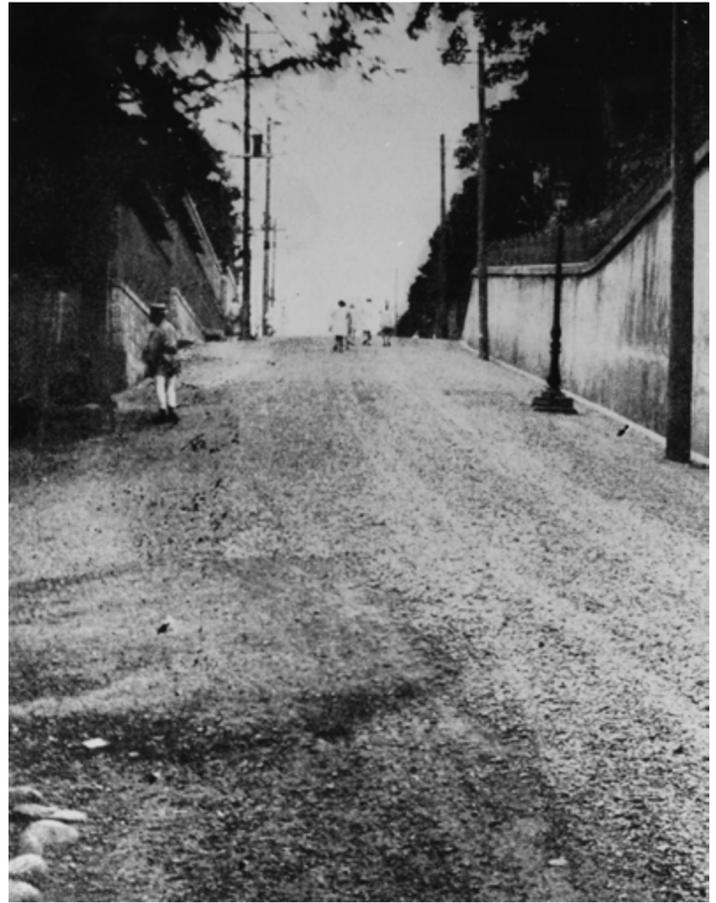
平成 21 年

ビルが並び路面には中華料理店やカフェが軒を連ねる。

鳥居坂（六本木5丁目）

昭和6年

鳥居坂は、江戸時代から大名屋敷のあったところで、その静かな雰囲気は現在も受け継がれている。



出典：麻布鳥居坂警察署誌



平成21年

今はインターナショナル、ハイテク、エコ、バリアフリーに対応した“ちいばす”が走る。

国立新美術館 (旧東大生研)



明治 40 年

出典：東京写真帖

東京大学の附置研究所である生産技術研究所は、昭和 37 年（1962 年）に六本木の旧歩兵第三連隊兵舎へ移転し、平成 13 年に駒場第 2 キャンパスへ移転するまで立地していた。

また、隣地を昭和 32 年より拠点としていた同物性研究所は、平成 12 年に柏キャンパスに移転した。



昭和 63 年

写真提供：東京大学生産技術研究所

その後、東大物性研跡地には平成 17 年に政策研究大学院大学が立地し、東大生研跡地には平成 19 年に国立新美術館が開館した。



昭和 37 年

写真提供：東京大学生産技術研究所

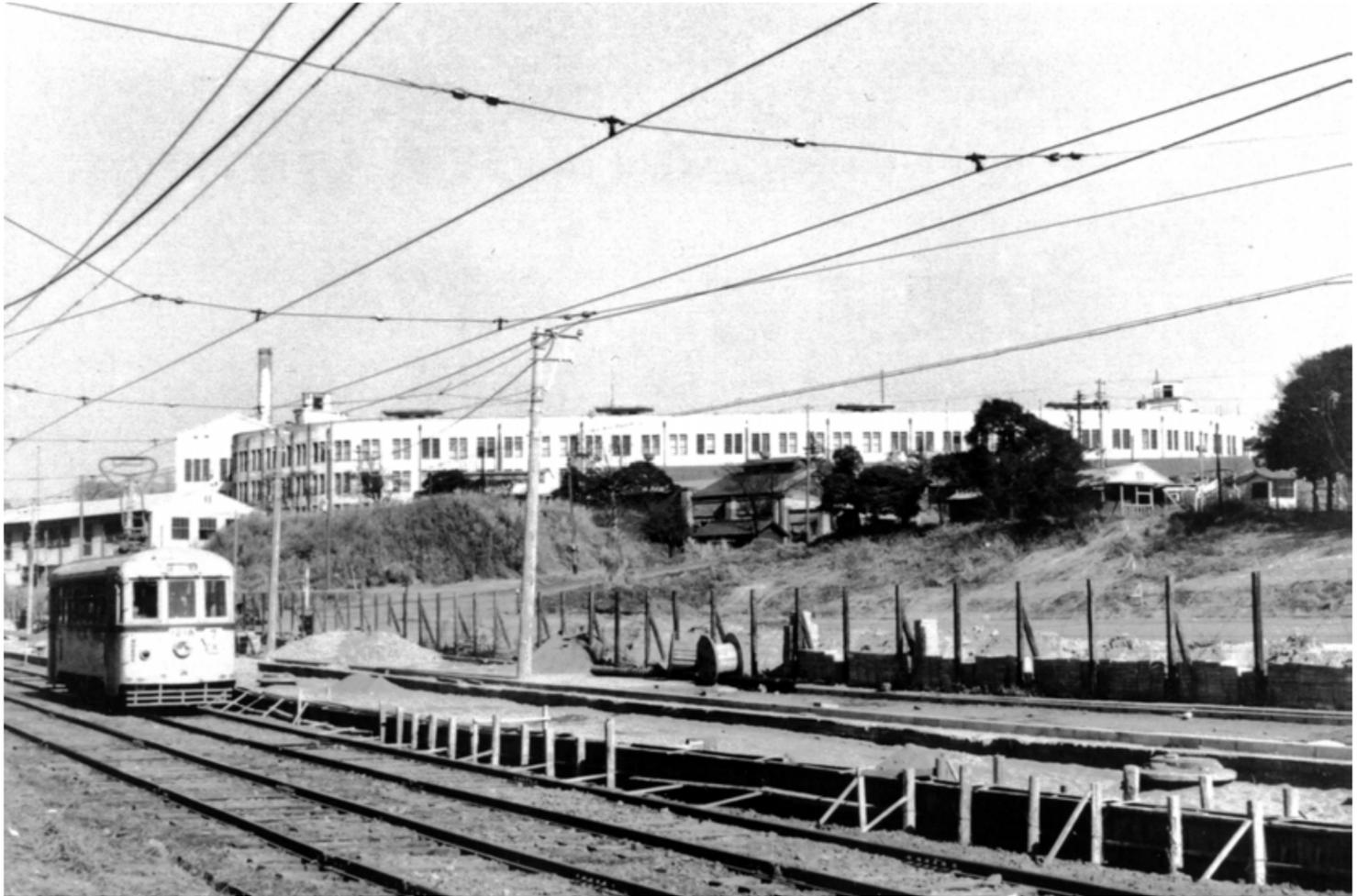
平成 21 年



手前が政策研究大学院大学、奥が国立新美術館。

←政策研究大学院大学から国立新美術館を望む。

ヘリポート前の空（六本木7丁目）



昭和 37 年

出典：みなと写真散歩

昭和 33 年（1958 年）に在日米軍が接收解除した後の新竜土町。右手は現在の都立青山公園、奥には旧歩兵三連隊兵舎（昭和 37 年に東京大学生産技術研究所が移転）の建物が見える。

都立青山公園は、昭和 45 年（1970 年）に整備・開園されたが、大部分は在日米軍赤坂プレスセンター（星条旗新聞社）及びヘリポートに占有されている。



平成 21 年

昭和 33 年（1958 年）に在日米軍が接收解除した後の新竜土町。右手は現在、都立青山公園からは、ヘリポートを挟み政策研究大学院大学と六本木ヒルズの間にある青い空を望むことができる。

六本木ヒルズ周辺



昭和 37 年

出典：みなと写真散歩

テレ朝通りから当時の材木町交差点を望む。道の左右、正面には小さな商店が軒を連ねる。

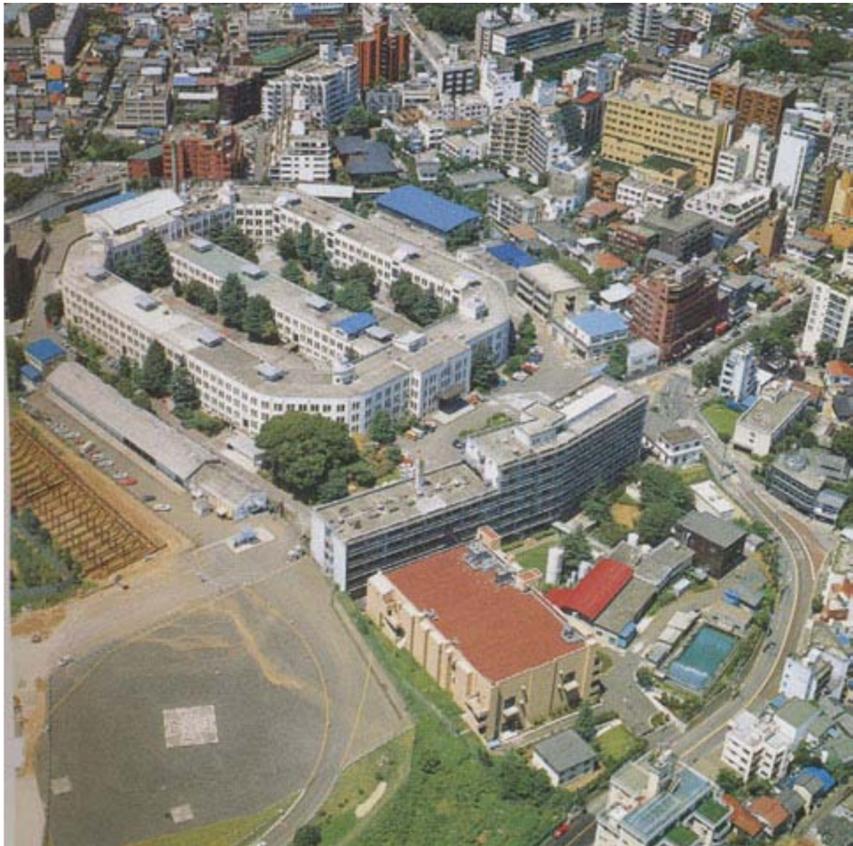


平成 21 年

現在のテレ朝通りと六本木 6 丁目交差点付近。小さな商店はなくなり、ビルが立並ぶ。



東京大学物性研究所（現 政策研究大学院大学・国立新美術館）



平成 11 年：六本木上空から



平成 23 年：六本木ヒルズから

周りに高い建物が建って、景色も一変している。



- ①物性研 A 棟(左)平成 10 年頃、(右)平成 23 年：今はモダンな政策研究大学院大学が立地し、多くの留学生も学んでいる。
- ②物性研 Q 棟(左)平成 10 年頃、(右)平成 22 年：棟の一部が国立新美術館の別館として残されている。
- ③正門(左)平成 10 年頃、(右)平成 23 年：最先端科学の研究所は柏に移転し、今は政策研究のスペシャリストを育成している。
- ④裏門から(左)平成 10 年頃、(右)平成 23 年：冷却池は夏になると、プール代わりに泳いでいる人もいた。
- ⑤テニスコート 平成 10 年頃：手前の 1 面が物性研のテニスコートだった。
- ⑥中庭 平成 11 年：ウサギや大きな尻尾の猫が住んでいた。

六本木七丁目(東京ミッドタウン西交差点)



平成 10年(1998年)頃: 東京ミッドタウンがオープンする以前の風景(現在の東京ミッドタウン西交差点)



平成 23年(2011年)

東京ミッドタウンのオープン後、向かい側に並んでいたマンションを含めたいくつものビルが取り壊された。現在は、暫定的に外国車のショールームとなっている。

国立新美術館への入口となるこの交差点周辺は、今後、道路も拡幅され、大規模な再開発が予定されている。

防衛庁→東京ミッドタウン



平成 9年(1997年)頃: 防衛庁



平成 23年(2011年) : 東京ミッドタウン

江戸時代、毛利家の下屋敷であったこの地は、その後、日本陸軍歩兵第一連隊の兵舎として利用されていた。終戦後は、連合国の占有を経て、長年の間「防衛庁」があった。

平成 19年(2007年)に東京ミッドタウンがオープンし、これまでにない賑わいを見せている。

東京大学生産技術研究所→国立新美術館



昭和 57年(1982年)：東京大学生産技術研究所・東京大学物性研究所

写真提供：小山浩氏

昭和 3年(1928年)に日本陸軍の歩兵第三連隊の兵舎として竣工したこの建物は、昭和 11年(1936年)まで陸軍が駐屯、まさに軍隊のまち「麻布」の象徴であった。
終戦後は連合軍が接收、昭和 37年(1962年)から東京大学生産技術研究所(一部は物性研究所)として利用されていた。



平成 23年(2011年)：国立新美術館

東京大学生産技術研究所は、平成 13年(2001年)に駒場キャンパスへ移転。
建物は取り壊され、現在は国立新美術館になっている(建物の一部は記念に残され、別館として利用されている)。

芋洗坂



昭和 57年(1982年)

かつて芋問屋があったことから、この名前が付いたと言われる。

写真提供: 港区立港郷土資料館



平成 18年(2006年)

六本木交差点と六本木ヒルズを結ぶ道であるが、この頃は電線地中化前で、歩道も狭く歩きにくかった。画面の奥には、既に東京ミッドタウンが建っている。

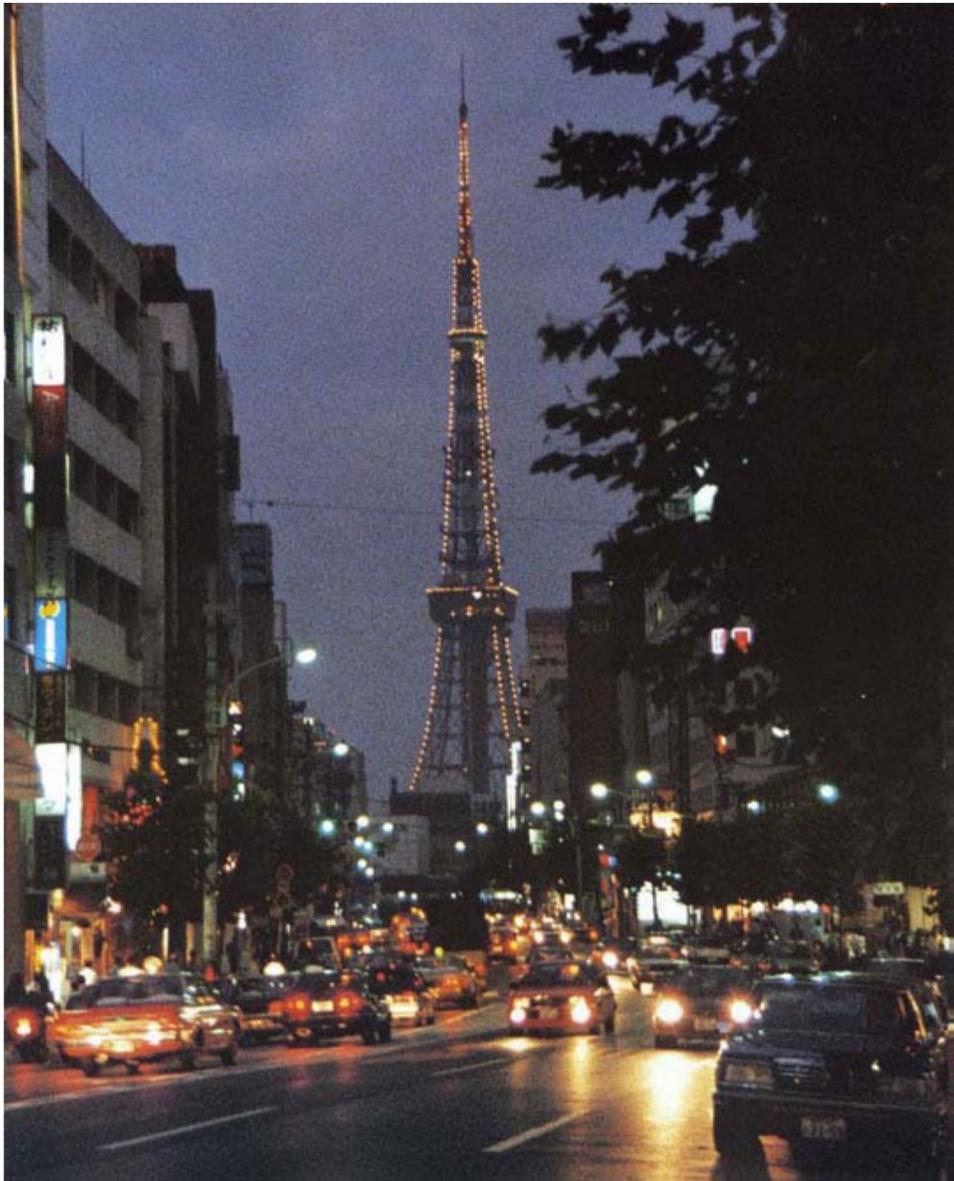
写真提供: 港区立港郷土資料館



平成 23年(2011年)

電柱と電線がすべて地下に埋められ、歩道も広くなり、街路灯やポラード(車止め)等も新しく整備された。

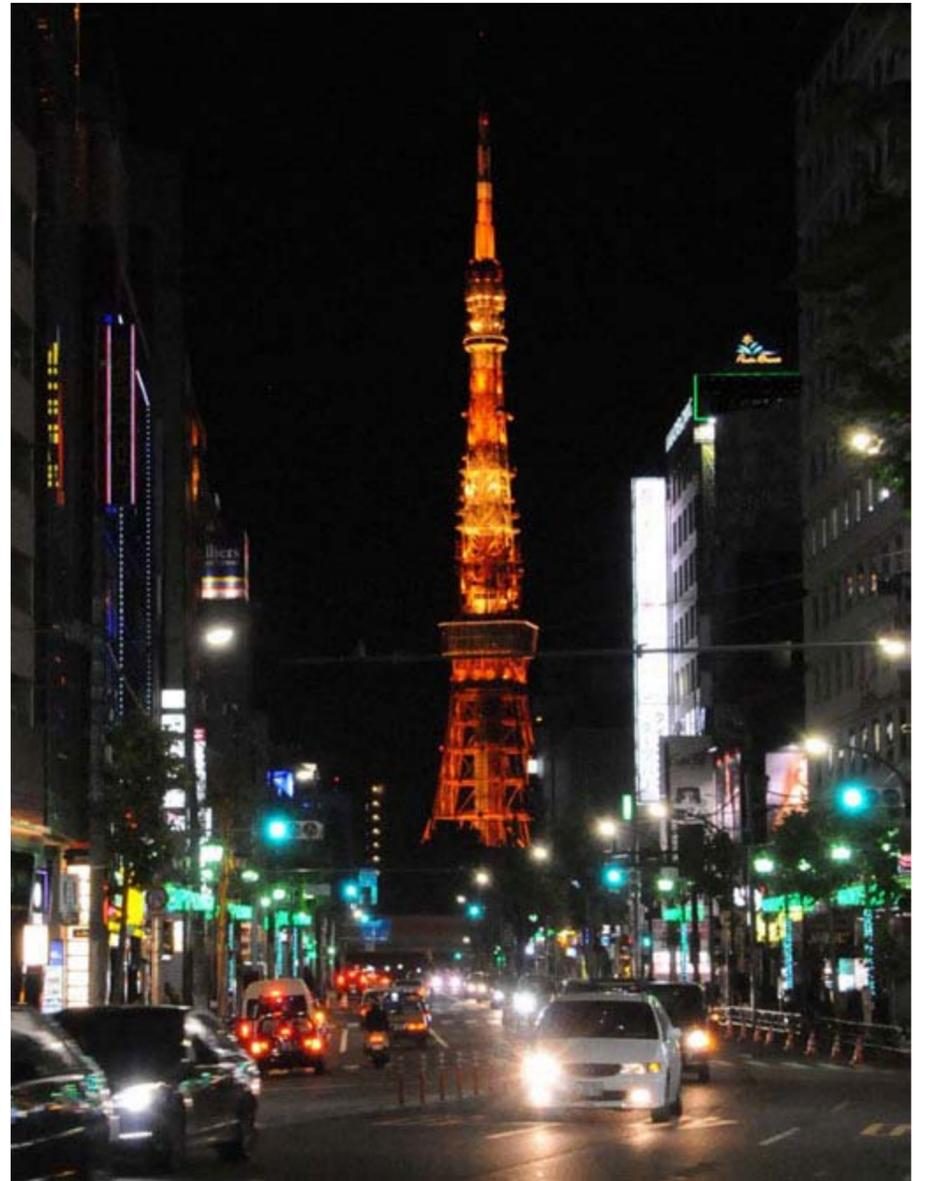
東京タワー



昭和 57年(1982年)

写真提供: 六本木商店街振興組合

東京タワーは昭和 33年(1958年)に竣工した電波塔で、地上333mは自立型建造物高さ日本一を誇っていた。



平成 23年(2011年)

スタイルも少し変わり、照明イメージは大きく変わったが、今も変わらず東京のシンボルである。手前に見えるまちの夜景も変わった。



平成 24年(2012年)：昼間の景色

文人の足跡をたずねて（龍土軒）



平成 24年(2012年)：龍土軒発祥の地[六本木 7-4-4]



昭和 56年(1981年)：
龍土軒遠景

写真撮影：田口政典氏
写真提供：田口重久氏

美術評論家の岩村透が麻布龍土町のフランス料理店「龍土軒」で開いていた洋画家たちのサロンに、若い文学者たちが合流するかたちで、明治 37年(1904年) 11月から「龍土会」が始まった。龍土会には国木田独歩、田山花袋、島崎藤村、正宗白鳥、徳田秋声など当時の文豪たちも参加し、芸術談義を交わした。当時の自然主義作家のほとんどが来会したので、「自然主義は龍土軒の灰皿の中から生まれた」とさえ言われた。龍土軒は現在は西麻布に移転している。



平成 24年(2012年)



昭和 56年(1981年)：龍土軒近景

写真撮影：田口政典氏
写真提供：田口重久氏

高いところから麻布



昭和 39年(1964年)：六本木五丁目付近

左側に見える広い道路は現在の永坂。その後、ここに高速道路が作られた。中央を縦に走る道は、麻布地区総合支所の正面出入口がある鳥居坂通り。左手に東洋英和女学院の校舎と校庭、右手には国際文化会館の建物と庭園が見えている。



皇居方面



谷町ジャンクション方面



六本木ヒルズ方面

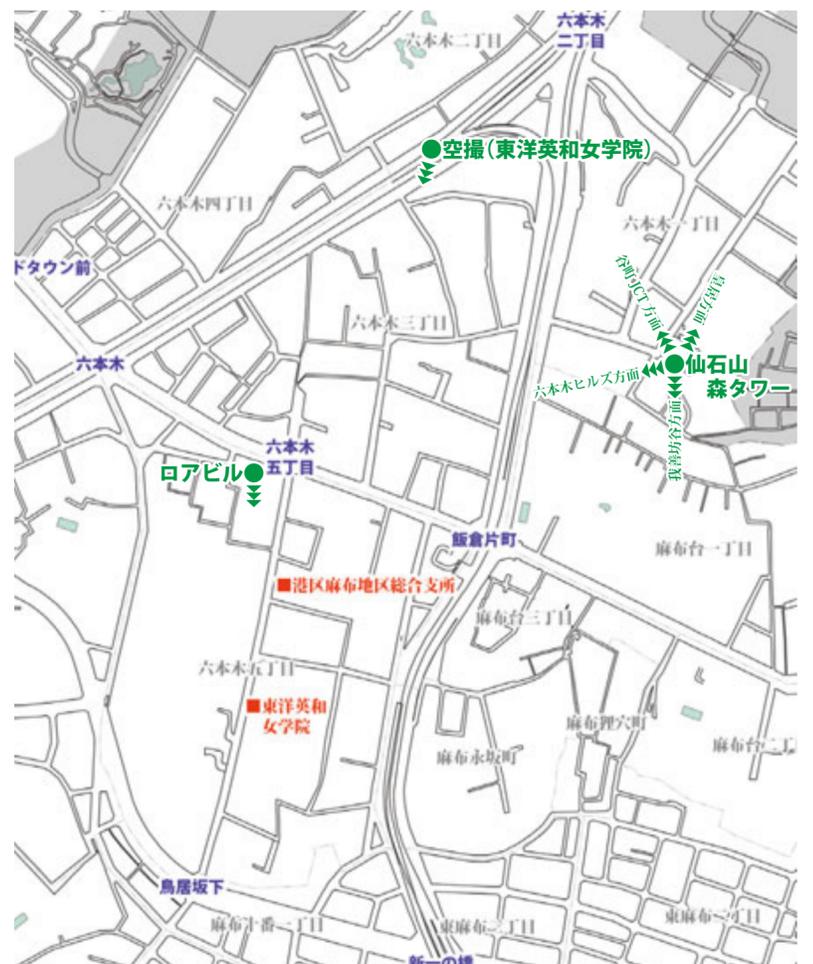


我善坊谷方面



平成 24年(2012年)：六本木五丁目

ロアビル上層階より、ほぼ同じ方向で撮影。



このパネルに掲載されている古い写真については、写真提供：東洋英和女学院。右側の小さな写真4点は、いずれもアークヒルズ 仙石山森タワーから平成24年に撮影。

鳥居坂

鳥居坂ものがたり

港区麻布地区総合支所や東洋英和女学院が置かれるここ鳥居坂周辺は、江戸から明治・大正・昭和にかけての歴史文化に深く関わる人びとの屋敷や施設が置かれ、近代の日本において、極めて特筆すべき地区である。『麻布未来写真館』の事業「鳥居坂ものがたり」として、その一端を残された写真と共に振りかえって見ることとした。

外苑東通りと鳥居坂

外苑東通りは江戸時代、お城の西に位置し、尾根道としての地形的環境（周囲よりも高い位置にある）から武家屋敷が軒を連ねた。尾根道として裏手はすぐに低地に向かってしまう中で、鳥居坂へのこの道は現六本木5丁目交差点から約500mの間、その高さを維持する珍しい通りであった。ゆえに外苑東通り同様、大名や武家屋敷が置かれていた。

当時の鳥居坂周辺地区の特色

1. 江戸時代、大名や武家屋敷が並ぶ一方、坂下には町人の家が並ぶような地形的配置となっていた。
2. かつて大名屋敷であった広大な土地が、明治維新後、財閥等に払い下げとなり、三井、三菱、住友の三財閥の関係者が顔をそろえることとなった。
3. 同じく、三條邸をはじめとする公家や、李王家、久邇宮家などの宮家、といった華族邸が並んだ。
4. 富裕層の人々により、著名建築家・設計者の手による貴重な屋敷や建物が建てられた。

名前の由来

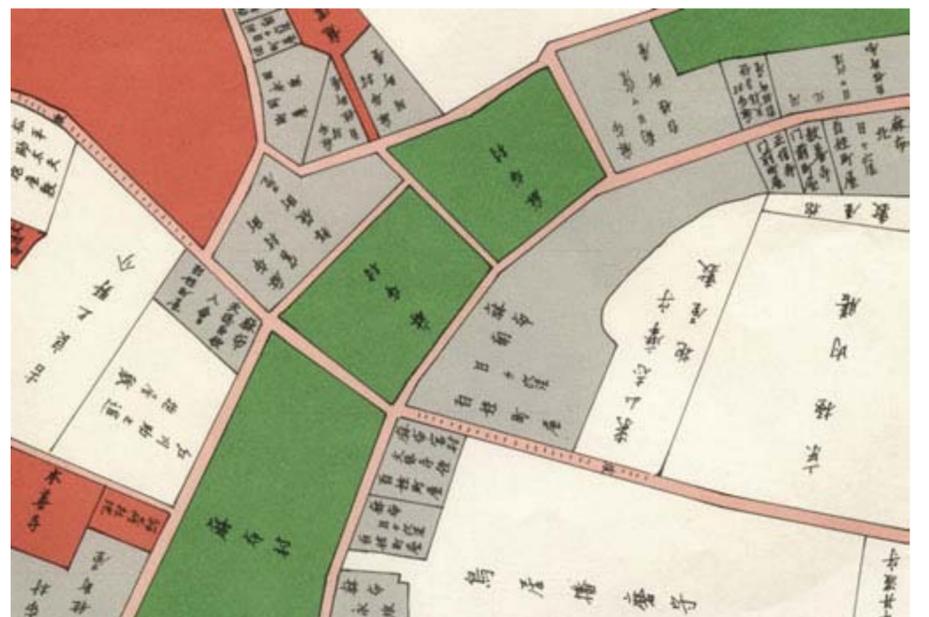
右の写真は、現在（平成22年）の鳥居坂である。鳥居坂の名のおこりは、慶長の初期に鳥居（鳥井）彦右衛門元忠が坂の東側（写真では右側）に屋敷を拝領していたからだといわれている。
また、一説では氷川神社の二の鳥居があったから、あるいは三の鳥居があったからともいう。

もともと坂は無かった

左の延宝（1673～1681）図によると、この通りは突き当たりであり、鳥居坂はなかった。その後の元禄版の江戸図（元禄12年（1699年））になって、現在の鳥居坂の道が現われる。これにより、今の鳥居坂ができたのは、元禄の少し前頃、鳥居家の敷地を一部つぶして道としたものと思われる。



延宝年間（1673～1681年）



元禄12年（1699年）

麻布小学校／麻布区役所

小学校から区役所へ

港区麻布地区総合支所がある場所は以前麻布小学校が置かれていた。

明治 36 年：麻布小学校

昭和 8 年：麻布尋常小学校

昭和 10 年：麻布区役所が市兵衛町 2 丁目
(現在の六本木 3 丁目)から移転

昭和 22 年：港区役所麻布支所
(平成 18 年からは麻布地区総合支所)

明治 36 年(1903 年)：麻布小学校



写真提供：港区立麻布小学校



市兵衛町時代の麻布区役所(明治 42 年竣工)

区役所が鳥居坂に移転する際、この建物は、武蔵野市にある日本獣医生命科学大学に移転された。



平成 22 年：日本獣医生命科学大学

昭和 12 年に移転した建物は、戦禍を避け、今も校舎として現存している。



平成 22 年：港区麻布地区総合支所

←昭和 10 年(1935 年)頃：麻布区役所

東洋英和女学院

ミス・カートメルの来日

カナダ・メソジスト教会(現在のカナダ合同教会)婦人伝道会社から派遣された宣教師ミス・カートメルは、明治15年(1882年)横浜に上陸すると、築地明石町に居を構え日本語の学習を始めた。その後日曜学校、バイブルクラスや若い女性の集会の指導を行なった。

東京で宣教活動が続けるうちに当時の日本女性が教育を受ける機会に恵まれていない事に気づいた。

東洋英和の発祥

折りしも明治16年(1883年)、カナダ・ミッション(カナダ・メソジスト教会伝道会社)のカックラン、マクドナルドの両氏が東京麻布に学校(男子校)の開設を計画しており、その建設予定地、東鳥居坂町13番地の下、14番地にビール醸造場の跡地があった。

明治17年(1884年)カートメルはマクドナルドの協力を得て、この地に女学校を設立した。



明治18年(1885年)：設立当時の校舎



明治18年(1885年)：東鳥居坂14番地付近

高地には東洋英和学校(男子校)が見える。



平成22年：鳥居坂下付近

鳥居坂の通りへの移転

東洋英和学校(男子校)は明治28年(1895年)、普通科生徒によって麻布尋常中学校を設立した。明治33年(1900年)9月には英和学校から分離、キャンパスを麻布本村町に移して麻布中学校となり、ミッションとの関係を薄めていった。この中学校が現在の麻布学園である。

この時期に東洋英和女学校は現在の鳥居坂の通りに面した場所に移転する。東洋英和女学校の跡地は、明治末年には高木兼寛の所有になっていた。彼は男子校のあった13番地と女学校のあった14番地をまとめて所有、東洋英和学校の旧校地も高木邸という広大な邸宅地へと変貌していった。

高木兼寛は薩摩藩士で海軍軍医総監に任ぜられ、後に現在の東京慈恵会医大を創立、貴族院議員等を歴任し、男爵も授けられている。

川崎邸・小田邸

三重の塔の川崎邸

鳥居坂町 2-1 は川崎金三郎邸であった。彼は千代田生命、千代田火災等の役員をつとめた人物である。土地の所有は定徳会、後に川崎定徳合資会社となる組織である。川崎邸には塔があったらしく、東洋英和女学校(現在の東洋英和女学院)の新築工事の向こう側にその塔が頭を出している。



平成 22 年

塔は現存しないが、手前右の塀(三條邸)は現在も残っている。

天文台のある小田邸

山尾家の東側、すなわち永坂側の土地(6番地と7-1番地)は三井十一家のうちの永坂町家の三井守之助邸があった。しかし、この土地は大正末年には小田良治邸となっている。三井守之助邸は永坂町1番地に移ったのである。小田良治は土地を入手するや大正13年(1924年)に、アメリカ人建築家ガーディナーの設計による天文台付きの洋館を建設した。小田は三井物産札幌出張所長などをつとめ、北海道で鉱山経営にもあたった。札幌にもガーディナーの設計による邸宅を大正4年(1915年)頃に建てている。その後、札幌で初めての近代的デパートである「五番館」を経営した。五番館は西武百貨店札幌店となっていたが、平成21年(2009年)9月末に閉店した。五番館の時代から通算すると100年以上に歴史を持つ。



平成 22 年：現在のフィリピン大使館



写真提供：東洋英和女学院

昭和 7 年(1932 年)

奥の三重の塔が川崎邸、手前は建築中の東洋英和女学校。



写真提供：東洋英和女学院

昭和 7 年(1932 年)

中央部の丸い建物が小田邸の天文台、手前は建築中の東洋英和女学校。



昭和 58 年(1983 年)

小田邸は、天文台もそのままに、一時フィリピン大使館として利用されていた。

東洋英和女学院②

鳥居坂デビュー

現在東洋英和女学院の建っている場所は、17世紀後半から明治維新までの間は戸田家の屋敷であった。その場所(当時の東鳥居坂町8番地)に明治33年(1900年)、木造4階建ての新校舎が開校した。



明治33年(1900年)：東鳥居坂町8番地の新校舎(左右とも)



大正3年(1914年)：裏手部分に増築、園舎とし幼稚園を開園した。写真右は平成22年：現在の風景

建築家ヴォーリス設計の新校舎へ

昭和8年(1933年)には、建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリスの設計による校舎が完成した。ヴォーリスは明治学院大学礼拝堂など、日本各地で数多くの西洋建築の設計を手懸けた。

ヴォーリス設計の新校舎は、スパニッシュミッション・スタイルが建築デザインの基調となっており、特に鳥居坂通りに面する西側正面の外観は、軒のスパニッシュ瓦、外壁の色付きセメント・スタッコ塗り壁を地とし、連続する半円アーチ形窓および出入口が様式的な特徴を表している。また外壁面の所々に配されたレリーフ、飾り窓の手摺り、建物前面を囲いフレアー状の曲面をつくり玄関に接続するロート・アイアンの飾り手摺り(金属類として戦中に供出)など装飾的意匠が表情豊かに配され、格調高い華やかさを添えていた。

さらなる発展・拡大

東洋英和女学校は順調に発展し、それにもない学舎施設の不足が明らかとなった。昭和4年(1929年)、在日本カナダ・メジスト宣教師社団は東鳥居坂町2番地の土地を鍋島桂次郎から購入。東洋英和女学校は新たなキャンパスの建築計画を立てていく。

外苑東通りに面する東鳥居坂町2-1の土地は、明治末年は鍋島桂次郎の所有であるが、同年の地籍図には三井財閥の幹部であった福井菊三郎の名も記されている。新校舎の完成に先だつ昭和7年(1932年)、ヴォーリスの設計による幼稚園、伝道館、西洋教師館ならびに寄宿舍「青楓寮」が竣工した。東鳥居坂2番地の施設等は、昭和15年(1940年)に東洋英和に譲渡され、戦時中の没収を免れた。戦後、在日本カナダ合同教会宣教師社団に返還されたが、昭和49年(1974年)に同社団より土地を購入、その後、六本木5-16-5(旧東鳥居坂2番地)の敷地は、昭和55年(1980年)に売却された。



昭和8年(1933年)：ヴォーリスの設計による新校舎。このころ鳥居坂の通りにはガス灯が設置されていた。

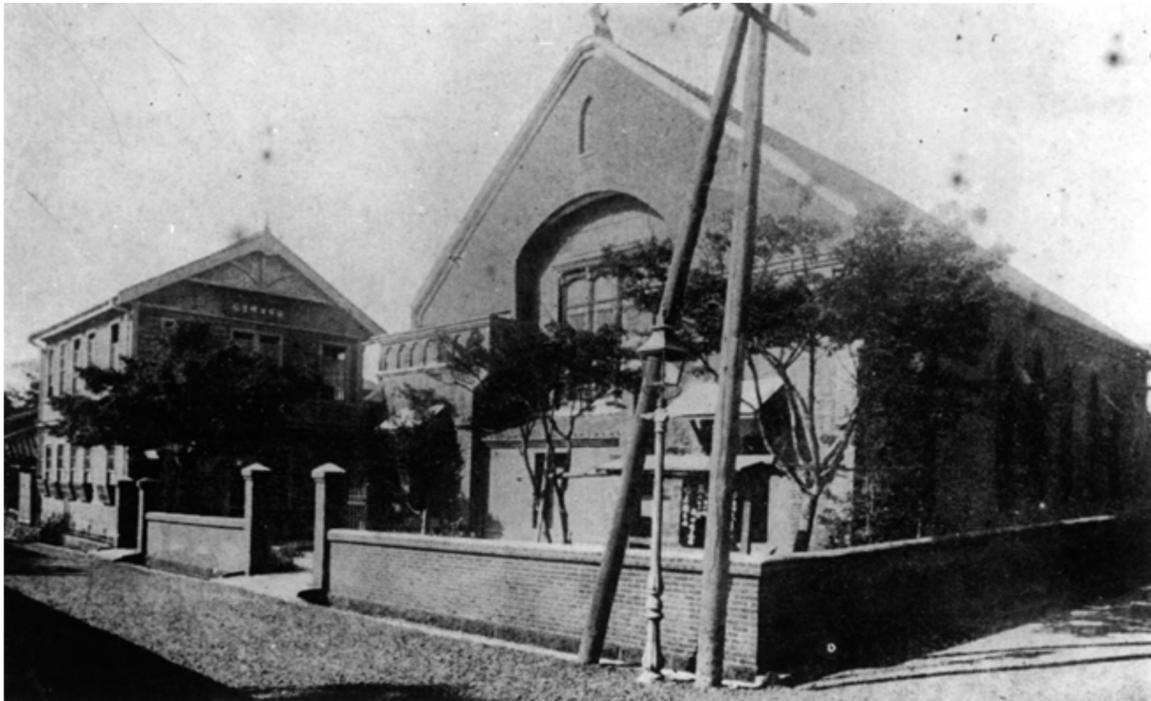


手前より幼稚園、伝道館、西洋教師館、寄宿舍「青楓寮」



平成22年

鳥居坂教会



明治から大正時代：新築された麻布教会会堂
場所は、現在の東洋英和女学院東門付近。ここにもガス灯がある。



平成 22 年：当時教会があった場所

永坂孤女院

教会の日常活動として、近隣社会への伝道奉仕活動を展開していた中で、明治 27 年 (1894 年) 頃までに近隣の貧困児童の教育施設である「恵風学校 (恵風女学校)」、「孤女院」が麻布一本松に設立された。

恵風学校が明治 36 年 (1903 年) に廃校となった後も孤女院は置かれ、明治 41 年 (1908 年) に永坂町 50 番地に新設された「日曜学校」の 2 階に孤女院は移転、名称を「永坂孤女院」とした。

孤女院は、大正 12 年 (1923 年) の関東大震災で一時的に閉鎖されたが、翌年には再開し、昭和 3 年 (1928 年) に「永坂ホーム」と改称した。

鳥居坂教会・永坂孤女院と東洋英和

鳥居坂教会 (旧麻布教会) が東洋英和女学校の地続きにあった頃、生徒達は全員、日曜日には麻布教会の聖日礼拝に出席していました。麻布教会で受礼し、卒業後も教会員として深い関わりを持った者も多かったようです。また、恵風学校と永坂孤女院の設立・運営は東洋英和女学校の宣教師、生徒たちの働きによるところが大きかったようです。

日本キリスト教団鳥居坂教会

明治 16 年 (1883 年)：マクドナルド宣教師が永坂町 50 番地に「築地教会講義所」を設立。

明治 18 年 (1885 年)：同所に「麻布教会堂」新築。

明治 22 年 (1889 年)：「麻布教会会堂」新築落成。

大正 12 年 (1923 年)：関東大震災で大破損し、同所に再建。

昭和 17 年 (1942 年)：法改正に基づき名称を「日本メソジスト麻布教会」から「日本キリスト教団鳥居坂教会」に変更。

昭和 20 年 (1945 年)：戦災で消失。

昭和 23 年 (1948 年)：東久邇家跡 (現在の六本木 5-6-15) に教会堂を建設することが決定。

昭和 25 年 (1950 年)：新会堂献堂式。



明治 41 年 (1908 年)：永坂孤女院

このパネルについての写真提供：東洋英和女学院

洋館

麻布地区における洋館

麻布地区には西洋建築の建物がいくつもあった。1980年代には多くの洋館を見ることができた。

六本木5丁目①

鳥居坂の通りに面している個人宅。平成23年撮影の建物も当年中に取り壊された。



昭和59年(1984年)



昭和59年(1984年)



平成23年

六本木5丁目②

鳥居坂の通りに面し、かなり最近まで残っていた建物である。



昭和59年(1984年)



昭和59年(1984年)



平成23年

このパネルについての写真提供：小山浩氏